

菰野町横山家蔵『伊勢三十三所観音霊地巡礼記』の翻刻と解題

鵜飼尚代 湯谷祐三

(解題)

ここに翻刻紹介する『伊勢三十三所観音霊地巡礼記』(以下、『巡礼記』と略称する)は、三重県菰野町の横山家に所蔵される江戸後期写本一冊で、楮紙袋綴全十二丁、縦二・二糎、横一七・〇糎の横帖仕立である。

本書は本学現代国際学部准教授である横山陽二氏が、二〇一七年春に菰野町の生家の土蔵より発見した多数の古文書の入った箱に含まれていたものである。表紙右上に「楽宵堂」(陽刻印)、左下に「太平幸民」(陽刻印)・「維中」(陰刻印)があり、同じく左下に「楽宵堂横山氏」と墨書があることから、本書が江戸中後期の同家横山維中(いちぢゅう)の手沢本であったことがわかる。

本書の内容は、「伊勢三十三所観音巡礼」とする部分(全六丁)と、「伊勢島巡覧記 参官名所図会より抄出す」とする部分(全六丁)の大きく二つに分かれ、前者の奥書には「右者鈴鹿郡阿野田村豊田氏順礼の記録を以文化十三年九月書写之」とあり、文化十三年(一八一六)九月に阿野田(現亀山市)の豊田氏の「順礼の記録」を書写したものであるこ

とがわかり、その書写者については、他の横山家所蔵資料の維中の筆跡と比較して同一のものと認められることから、『巡礼記』もまた維中の自筆書写本と考えられる。

横山維中は、延享四年（一七四七）に生まれ、幼名を嘉吉・周吉といい、号を維中・是閑と称した。当時横山家は村の庄屋をつとめ、菰野藩にも仕えていた。維中は長じて藩儒竜崎致斎より経史を学ぶ一方、『古事記』『日本書紀』などの日本の歴史書にも目を通し、古墳等の実地調査も行った。安永五年（一七七六）に父三楽が逝去すると維中は家を継いで徒目付役となるが、維中は藩務のかたわら郷土研究にも精励し、ヤマトタケル陵の考証や、伊勢・伊賀・志摩の地方誌である藤堂元甫の『三国地誌』の研究なども行い、いくつかの著作を残して文政十年（一八二七）七月二十三日に八十一歳で逝去した。よって、『巡礼記』は横山維中が七十歳の時の書写本ということになる。

なお、「維中」は現在「惟中」と表記されているようだが、本書表紙の印章並びに『三国地誌』朝明郡の巻表紙の自筆書名は「維中」とあり、本稿ではこれに従った。また印章「楽胥堂」の「楽胥」とは「たのしみよろこぶ」という意味で、『詩経』小雅・桑扈の「君子樂胥、受天之祜」（君子がたのしみよろこべば、天の幸いを受ける）に由来する言葉である。

次に本書の内容に移る。前述のごとく、本書は「伊勢三十三所観音巡礼」と「伊勢島巡覧記」の二つの部分よりなるが、後者は『伊勢参宮名所図会』（寛政九年刊）からの抄出であるから、本稿では前者「伊勢三十三所観音巡礼」の内容を中心に述べることにする。この「伊勢三十三所観音巡礼」とは、伊勢地方に所在する観音菩薩の三十三の霊場を巡礼するというもので、著名な「西国三十三所観音巡礼」にならったものであることは明らかである。その巡礼地は大きく伊勢神宮付近から多度大社へと並んでおり（三国峠を越えれば多賀大社にもつながる）、伊勢神宮参詣後の帰途、これらの観音霊場寺院を巡礼できるように配列されていると思しい。

この巡礼の発生についてはつまびらかでないが、川村利勝氏の『観音霊場史跡の旅 伊勢西国三十三ヶ所案内記』（昭

和五十七年刊、以下『案内記』と略称)には、『伊勢順礼案内記』なる資料が紹介されており、そこには「むかしむかし勢陽安野津に道源といへる桑門あり。此神風のうちに不思議の靈仏数多有り。何卒順礼を草蒼せんと二見方江寺を始とし三十三所を三十三番迄その次々を極順廻す(中略)寛保元年辛酉炎夏龍集」として、以下三十三ヶ所の観音霊場寺院名が列挙されており、これらは諸寺院は、横山家蔵『巡礼記』の記す諸寺院と全て一致している。このことから、伊勢の観音巡礼は、年次不詳なるもかつて安野津にいた道源なる僧侶が創始したもので、江戸中期の寛保元年(一七四二)にはその構成寺院が定まっていたのである。

現在も伊勢観音巡礼は存続しており、その構成寺院については、江戸期のそれとは多生出入りがあるが、総じて観音霊場には古代・中世以来の顕密寺院(天台宗・真言宗など)が多く、険しい山岳に壮麗な伽藍を建造していることも珍しくない。事実、伊勢観音霊場を構成する諸寺院の中にも、そうした大寺は少なからず含まれており、各種文化財の所蔵も既に確認されている。今後、この『巡礼記』を片手に改めてそうした霊場をまわることによって、新たな「観音の里」「かくれ里」の魅力が再発見されることを願ってやまない。

本稿では、この後『巡礼記』の内容を一覧表にまとめた上で翻刻を掲載することになるが、その前に、『巡礼記』を史料として公開し翻刻の機会をくださった所蔵者・横山陽二氏に厚く御礼申し上げたい。

番	道中	宮川から二見へ三里。川崎・二軒茶屋経由。
1	大江寺	現二見町江の潮音山大江寺(真言宗醍醐派)、本尊は千手観音坐像(重文)。古くは江寺という。『勢陽雜記』に伊勢順礼の第一番札所とされる。坂士仏の『参詣記』にも記載される。
	道中	二見から朝熊嶽へ百丁。
2	観音寺	十一面観音。勝峰山観音寺。金剛証寺に遷座したという。

19	安養寺 道中	十一面観音。日蓮宗。阿野田の幡間山安養院、今慈眼寺。赤尾の天神あり。
18	附南寺 道中	亀山道から牛おろし、松林を経て阿野田へ。 千手観音。真言宗。補陀山附南寺。国府の阿弥陀の秘仏。国府のうえ寺。
17	林光寺 道中	千手観音。金井山林光寺。 神戸より西条・三田市・算所を経て国府（現鈴鹿市）に至る。
16	観音寺 道中	白子から神戸（現鈴鹿市）まで一里半。 白衣観音。真言宗。白子山観音寺。不断桜の名木あり。
15	観音寺 道中	小川・上野・寺家を経て白子へ。 十一面観音。真言宗。今井山観音寺。庵芸郡今井村。
14	観音寺 道中	塔世橋から四天王寺参詣。一身田・極楽橋を経て今井へ。 正観音。真言宗。恵日山観音寺。「津の大御堂」。「国府の阿弥陀」あり。
13	長谷寺 道中	五軒茶屋を経て津の寺町西来寺へ。 十一面観音。近田山長谷寺。「ちかたはせ」。
12	神宮寺 道中	丹生・伊沢・松坂・月本・久居を経て、木造川の舟渡あり。 十一面観音。真言宗。丹生山神宮寺。「丹生の大御堂」。
11	近長谷寺 道中	脇に道があり、先で二つに分岐、左へ下ること十八丁、高野街道である。 十一面観音。真言宗。丹生山長谷寺。「丹生のはせ」。多気町長谷。

28	地高寺	千手観音。禪宗。飯倉山地高寺。
	道中	上木 <small>あけき</small> を経て、世古泉村へ。
29	多井寺 <small>おおい</small>	千手観音。穴太山多井寺。
	道中	星川へ半道。
30	安渡寺	十一面観音。真言修験。星河山安渡寺。
	道中	桑名入口へ一里半。多度へは半道（半里）余り。
31	勧学寺	千手観音。真言修験。走井山 <small>はしりぞえ</small> 勧学寺。桑名郡矢田村。
	道中	東方村を経て下深井部村まで五十丁。
32	飛鳥寺 <small>ひちよう</small>	十一面観音。雨尾山飛鳥寺。
	道中	山を下り、深井部へ戻り、野代の虚空蔵に参詣。多度川を越え多度へ。
33	法雲寺	十一面観音。多度山法雲寺。愛宕権現あり。多度神社へ参詣。

※一般的に一里＝三十六町、一町（丁）＝六十間＝三百六十尺＝約一〇九米などとされる。

【翻刻】

凡例

- 一、通行の字体を使用する。
- 一、読解の便をはかるため、句読点を施した。

- 一、改行・濁点は原本のままとした。
- 一、片仮名の振り仮名は原本の通りである。
- 一、検索の便をはかるべく、各巡礼地の間を一行空けることとした。
- 一、原文の割注はへゝに入れて示した。

「楽胥堂」(陽刻) 伊勢三十三所観音霊地巡礼記 楽胥堂横山氏 「大平幸民」(陽刻)・「維中」(陰刻)
(表紙)

伊勢三十三所観音巡礼 「楽胥堂」(陽刻)

宮川より二見へ三リ。

但川崎へ壱リ半、二軒茶やへ八丁。

此所川崎より月本と云より第三番松尾へ

参りてよし。尤案内頼てよし。五十文。松尾ニ

二ツ池有。松尾より黒瀬へ六丁、黒瀬より

塩合、川船賃六文。是より二見へ三十丁と云。

立石、宿屋有。

二見浦、立石、立石村より大江(まで)□□十二丁と云。

第一番 度会郡 二見ノ江でら、禪曹洞宗。

千手 潮音山 大江寺。

是よりあさまが嶽へ百丁。

立石村より三津村、左朝熊道、村を出て

右ノ方ニ浜荻、今ハ田ノ中ニ少し有。

あまの釣舟、川舟わたし、二見より朝熊村へ五

十丁、宿屋多く町長し。上り坂二十二丁、

坂ノ上茶や有。休泊共よし。遠景無双、奥

の院迄八丁。

二番 朝熊嶽

十一面 勝峰山 観音寺

本堂虚空蔵、奥ノ院地藏、参詣所多し。

万金丹店向より鳥羽へ五十丁、本坊より」(1オ)

も鳥羽道有。万金丹より磯部へ二り半、内山

坂六十丁下り、夫より磯部迄四十丁也。御師二泊

りてよし。

磯部二社（伊雑皇太神宮ト云）、磯部村より八丁。

磯部より宇治へ百五十丁、内十丁程行、多びはら村へ

より鸚鵡石へ案内頼行べし。四十丁ほど行て

屋たての茶屋有。むしろ戸、三ツわの釜、筵敷候事
 上代のいわれ有、可_レ聞。是より内宮へ百丁。やたて
 の茶屋より猿田彦太神宮の御山へ上り可_レ參、御山
 を下り、四十八瀬川、一ツの川を数十度渡るなり。
 中ほどに茶や有。大山の神より宇治御祓町へ下る。

内宮

宇治橋を渡り、三番の松尾へ一り半、朝熊より
 直に下り参候ても道遠し。周て川崎より
 参り還に寄る也。

三番 まつの尾てら

十一面 龍池山 松尾寺 二ツ池あり。

四番 慶光院の北西 うぢの長命寺

正観音 神鼓山 長命寺

是より黒門へ出、蓮台寺村へ十町、左へ左へと行べし。〔一ウ〕

五番

正観音 鼓嶽山 蓮台寺

寺より五丁、奥二滝有。

外宮へ十五丁。せぎ寺、寺ハあれども、今ハ

下中の郷、不動院と尋ぬべし。豊トヨの文庫

のさわへ出、岩戸坂の下へ出。

外宮

是より下中の郷へ四丁。

六番 せぎでら 修験宗

十一面 神明山 不動院

是より町次、尼が辻まで四丁、夫より越坂フツサカ

寺町迄三丁、大湊オホモリ神社道。

ヲ、ミナトカミヤシロ

七番 おつ坂寺町 十一面堂

十一面 真龍山 実性寺

是より三丁ほど行、月読ノ宮へ参り、山田

の町を通り、すじかひ橋より宮川上ノ渡し、

田丸口へ出、三十丁也。舟渡し川向、川ばた

と云宿屋有。上地村へ二十五丁、夫より田丸へ

二十五丁、田丸城有。町よし。宿屋よし。夫（2オ）

より田宮寺村へ半道。

八番 田丸の田宮寺

十一面 富向山 田宮寺

是より東原村へ五十丁。かの、松原といふ

松原を通り、熊野道也。原村二宿屋有。

角屋幸介二宿。原村よりくづかへ五十丁、内坂十八丁。

九番 原村ノ地内也 天台宗

十一面 涌福知山 国東寺

是より西原村へ下り二里、小坂有。よくく尋
とい合行べし。さな村へ一り半、但し東原村へ

戻りて行がよし。国東山の上景よし。松坂

黒部浦等ミゆる。東原村へ戻り、西原野

中村ニ熊野・高野わかれ道有。高野道を

行。さな・仁田村、河原茶屋・宿有。東原より

五十丁合して三り半也。往還より八丁入坂

有。景よし。

十番 多気郡 さなのこんがうさん

如意輪 天台宗 摩尼山 金剛座寺(2ウ)

桜の名木有。楠十一かい有木あり。本堂

の脇より山ごへ一りほど、よく尋行べし。

ミねにて右に相可 アツカ・伊沢見ゆる。

十一番 飯高郡 丹生のはせ 真言宗

十一面 丹生山 近長谷寺

名木等あり。景よし。堂の脇より道

有。先にて二ツに分る。左へ下り十八丁、丹生

町、高野街道也。

十二番 とうの大御堂 真言宗

十一面 丹生山 神宮寺

弘法大師入唐以前の草創也。四十九谷

有といふ。奥に太神宮の末社二社あり。

是より十三番近田のはせ・おがわち・よこだけ・

あざか・おがわ・すがぜ・久居・田中・はせ迄七り。

此道小河多キゆへ、大雨にハ難義なり。松坂へ

出てよし。

先丹生より中かい道へ出、松坂へ四りと云。丹生

より少し行、とうげと云有。つるへ行、宿

も有。松坂へ行也。又相可・伊沢へ寄バ

半道も廻りのよし。」(3オ)

丹生よりあひば・三疋田・四疋田・相可迄アフカ

二り、川舟こし、伊沢。此所に天台蓮生

寺有。伊沢より松坂へ二り、松坂より

月本へ二り、月本より久居へ二り、川原木造コウキ

川舟渡し。木造堤・桃林通り、牧村久

居御屋敷あり。田中村へ一り、しぶくろ・は

せへ一り、丹生より八り半也。

又松坂より三り、西飯福田村イフクダ、国峰山飯福

田寺有。いぶた山上ウシゼウといふ行場ゲフバ有。

十三番 安濃郡 ちかたはせ

十一面 近田山 長谷寺

是より津へ二り、はせより五軒茶やへ一り、

南河路カフチへ八丁、津へ

寺町西来寺へ参り。

十四番 津の大御堂

正観音 真言宗 恵日山 観音寺

寺中に国府の阿弥陀有。塔世橋へ出、四天王寺へ参。上津部田通り近道也。津より今井へ五十丁余。一身田へ参、極楽橋へ出、今井へ八丁。

十五番 庵芸郡 今井村

十一面 真言宗 今井山 観音寺」(3ウ)

白子へ二り半、小川・上野・寺家。

但今井より谷、田端・高佐・北黒田浄光寺へ参、一り。黒田よりあかふ・上野へ一り。上野より大別保・磯山、寺家へ一り。

十六番 白子ノ寺家村

白衣 真言宗 白子山 観音寺

不断桜の名木有。

白子・打越・玉垣・矢橋村ニ鎌倉権五郎景政の

古跡有。神戸へ白子より一り半、御城下也。

十七番 河曲郡 かんべのはやしでら

千手 金井山 林光寺

神戸より西条シ・三日市・算所、夫より野、松林。十八番の道しるし有。又左右二大道あれども夫ハ無用。是まで来たるむかふの細道へ行。其先二小橋有。道二筋有。左の田の方へ行也。

十八番 鈴鹿郡 国府のうへでら

千手 真言宗 補陀山 フナン 附南寺

古八大伽藍也。上寺山と云所に有。今の寺地ハあみだやしきと云て、国府のあみだの所也。今客殿ニコふのあみだ其外秘仏有。

是よりあのだへ一り也。国府本郷亀山道へ出、牛おろし、松林より下り、あの堤をのぼり、向ニ菅内村スガチを見、あのだ堤へ出、赤尾の森へ出てよし。又中野よりあのだへ行も(4才)よし。

十九番 阿野田の安やう寺

十一番 日蓮宗ハクマ 幡間山 安養院。今慈眼寺ト云

昔ハはたまだにといふ所に有。今ハ寺号もかわりて
森といふせこにあり。寺のうしろ、すわらの清水が
上といふ所にめぐり有。

赤尾の天神へ参、森の中より西堤へ出、関川
をこし、住山へ一り、亀山御城下羽若はわか・住山、
又ハ亀山西町より市ヶ坂通り行ハ近し。

二十番 すみやま寺

十一面 黄檗宗 日照山 円福寺

小川へ三十丁、原尾ハラビへ十二丁。

二十一番 わらびのうち山

千手 禅宗 青龍山 宗徳寺

是よりわらび川こへ、安楽村・池山村ニ野登寺の本
坊有。坂本村より上り坂也。原尾より野のほり迄二り、内
三十余町坂也。

二十二番 野のぼり

千手 真言宗 鷄尾山 野登寺

大杉・御池・北坂を下り、上野・北畑・原村へ一り半、川をこへ野を通り、高神山へ山上より三り也。

又二十五番尾高へ逆二行にハ、野登より小岐須へ一り亦二十三丁。」(4ウ)
石大神屏風岩へ寄てよし。小岐須より山本へ八丁、

一ノ宮へ参。大久保・水沢・こものへ出てよし。

又足よわき人ハ、北坂險岨ゆへ、南坂を坂本へ戻り、

池山・安楽・原尾、刃法寺村不動院、景清の守

本尊へ参、川崎村へ出、おんべ川をこへ、広瀬村

高神山へ参もよし。

二十三番 かうち山 津賀村

十一面 真言宗 紅葉山 観音寺

高神山より笠堂。日本武尊の白鳥の陵へ参。

上田へかゝり、石薬師へ一り、小谷村より入、南小

松・北小松・貝下・波木・西日野。夫より山をこへて

松本・大井手・三重川をこへ、いくわ・東坂部より

山をこへ垂坂へ行也。坂部ハ四日市より菰野への往

還なり。大井手も同断也。

又海道筋を石薬師より四日市・あくら川村より
入て垂坂迄、高神山より四り半也。

二十四番 たるぎか 朝明郡垂坂村

千手 天台宗 垂坂山 観音寺

元三大師の影有。木像也。

是より東坂部迄戻り、西坂部・赤水・下村・竹

成・朝明川をこへ、杉谷村の出里めうかといふ所より

尾高へ野をのぼる也。杉谷迄三り半也。」(5才)

又菰野湯山へ行にハ、たる坂より西坂部、是より菰野

往還也。江村・黒田・三重川をこへ、福村・菰野へ

三り也。菰野、御屋敷有。湯山へ二り、宿や・問屋

有。湯元より千草へ一り半、尾高へ半道余り。

又菰野より尾高へ行二ハ、三重川こへ、土山・音羽・福

松・奥江・朝明川をこへ、苗鹿ミヤウカより野を登る。菰野より尾高迄二り。

二十五番 朝明郡 すぎ谷のおだか

千手 尾高山 引接寺 インゼウ 観音堂計にて無住也

すぎ谷へ半り、野中ニ杉谷道有。

二十六番 すぎたに

十一面 禪宗 久国山 観音寺

田光・田口・宇賀の東を通り、石ぐれ・丹生

河より員弁川をこへ八田へ、杉谷より二り。八田より

東前寺・上野尻・大垣内・坂本へ、八田より二り。

合して四り也。

二十七番 さかもとのなぐたに

員弁郡坂本村

千手 禪宗 鳴谷山 聖宝寺

庭の景よし。是より大垣内迄戻り、下野

尻村・いなべ川こへ、瀬木村の前を通り、飯倉

村の入口ニ川有。坂本より一り。」(5ウ)

二十八番 いぐら

千手 禪宗 飯倉山 地高寺

此所よりあげきへ八丁、宿有。桑名より時・多羅・多賀・

彦根への街道也。あげきより一り十丁ばかり。

笠田新田より十丁、大泉新田・北山田・六羽野村
入口より南へ入、せこいづミ村。

二十九番 あなほのおほるだう

千手 穴太山 多井寺

但あなをのおほる堂と云てハしれがたし。世古

泉村穴太山多井寺と尋べし。

是より星川へ半道也。北あなを村の堤を通り、

谷川二ツこへ、かれ川村・星河村。

三十番 ほしかわ

十一面 真言修験 星河山 安渡寺

桑名入口へ一り半。但逆ニ多度へ参ニハ二り也。

星川より力尾へ一り、猪飼へ十丁余、山こへて多

度へ半道余也。

三十一番 はしりざん

桑名郡 矢田村

千手真言宗 走井山 勸学寺(6才)

是より東がた村へ八丁余、下深谷部村シモフカイベへ五十丁程、
おくじよへ八丁余、山の上に有。尋べし。

三十二番 ふかいべのあめのを

十一面 雨尾山 飛鳥寺ヒテウ

雨尾山より下ふかいべへ戻り、野代ノシロへ一り、虚

空蔵へ參。野代神社東ノ田ノ中に森見ゆる。

ひじへ村・戸津村・多度川をこへ、茶や・宿有□。野代 ※「戸津村」の「津」に濁点有。
より一り、合して二り也。又野代より山を下り谷へ

おり、ミその村へ行バ一り也。子共案内ニ頼べし。

三十三番 たどのわしのくら

多度村

十一面 多度山 法雲寺

峰ニ愛宕権現有。遠景よし。

多度神社 両神主ありて大社也。

末社 一目連イチモクレン・一拳大明神ヒトコウシあり。

五月五日、やぶさめ祭あり。

右者、鈴鹿郡阿野田村豊田氏順
札の記録を以、文化十三年九月書写
之。」(6ウ)

伊勢嶋巡覽記

一 參宮名所図会より抄出す「楽宵堂」(陽刻)」(7オ)

伊勢嶋巡覽

一 許母利神社コモリノ 松下村海際高キ山の

上に有。祭神、粟嶋の神。内宮撰社十

五所の一ツ也。

一 神崎山カウザキ 松下村の後山をいふ。いせ記ニ、西行

法師の侍ける安養山と云所ニ、人哥よ

ミ、連哥などし侍し時、海辺の落花

といふを

秋をやく神崎山ハ色きへてあらしの

末に海士の藻塩火 長明

一 神前神社 クワフサキヒメノミコト
荒前姫命、則地主神也

菟野町横山家蔵「伊勢二十三所観音霊地巡礼記」の翻刻と解題

といふ。此地を二見の潜り嶋と云。六月十五日
 内宮の神人十人御浜出之儀式有。此時
 江村の里人寒水を献ず。潮音山大江
 寺の麓、亀井の水也。

一 祓崎^{ハラヒサキ} 荒崎の尾崎沖へ壺丁斗りつき

出たる平かなる大岩也。俗に狙嶋^{マツイタ}、狙岩、
 御座岩ともいふ。満汐ニハ見へず。六月十

五日内宮の神人十人、御贄^{フシズ}の磯菜を取、^{ツト}「(7ウ)
 苞ニしてかへる。一字田村若の山といふ
 所ニて刈例なり。

一 笏立石^{シヤクタテ} 右の傍に有て、神人の笏を
 おく所也。

一 潜り島^{カケ} はなれ嶋ニあらず。若崎の尾先
 なり。すべて岩山ニて大なる洞穴あり。
 くゞりぬける故になづく。

一 千尋^{チヒロ}の浜 千尋の海とも云。神崎

くゞり嶋の辺を云。

後撰

いせの海千ひろの浜にひろふとも

今ハ何てふかひかあるへき 敦忠朝臣

一 伊気浦^{イケ} 山を浮嶋山といひて、山上の

眺望よし。今ハ志州の内、内宮領松下

村の東に有て、山中へ深く入たる江也。

寒中ニハ鱒^{ボウ}其外魚多く集る事あり。

是をいけ浦のたてと云て、極月正月

漁する事、毎年しかり。

松の吹伊気の浦風わたるらし浪に

た、よふうき嶋の山

一 栗皇子社^{アミミコ} いけ浦に坐す祭神素^{イマ} 一 (8才)

蓋烏^{サノヲ}ノ御魂^{ミタマ}為る命。内宮撰社二十四座

の内也。

一 阿波良岐嶋 ハラギ 俗ニ飛嶋と云。潜り嶋の

良 ウシトラ 十丁斗りに有。是より東へ廻る入江を

いけ浦といふ。又神崎の向ひニ小嶋七ツ

有、これをあはらげといふ。其所ニ草木の生

ぬ岩有、是を毛なしと云。熱海神船子

の哥に

あはらぎや嶋ハ七嶋そのほかにけなし

かて、ハ八嶋なりけり

一 神嶋 飛嶋より東北三里斗りニ有。荒

海にて舟つきがたし。されども人家有

て、獵師すめり。嶋中の洞穴ハ伊良子が

嶋へ通じて、行程三里といへり。又内海の

野間ト云嶋、飛嶋の北ニ有。陶器を焼烟

常ニ見ゆ。

一 深瀬 飛嶋と火打嶋との間をいふ。汐の

さし引の瀬にて甚深し。

一 小浜 人家五十軒余有。大船多泊る
湊なり。

一 森下 小浜の船の寄所をいふ。」(8ウ)

一 有滝 遠浅

一 由曾津 嶋三ツ有。俗ニくそつといふ。

一 宿浦 花岡といふあら磯

一 神津佐 あら磯

※「神津佐」の「津」に濁点有。

右五ヶ所、風汐にかまひなく船が、り
よし。迫間までの内に獅子嶋、御所嶋、
つゞら小嶋、あまさき嶋、くら嶋有。

一 槌柄 礫浦、相可、宿浦、阿曾津浦、

これ皆荒磯の辺りに有て、遠く望めバ

只ならぬいハほの山、そこ、に幾らともなく

重り、面白さいふべきにあらず。実に松嶋

象潟にハ勝るとも劣事なし。心有

人の見過す所にハあらじかし。

一 日和山 鳥羽の日和山也。山上ニ松の大木

あり。其下二一亭有て、磁石シヤクを常二居へたり。

舟人の日和を見定る所也。眼下の浦々

嶋々ハ、庭中の泉水ニ取得しごとく、

しかも限りなき江海大なるきわなれば、自佳ソツカラ

景の画中二有がごとし。」(9才)

一 佐田の浜 ひより山より下り道有。泊

船多き所なれば、うかれ女どもの棹さして、夕

べくくの浪枕繁く、其数さへも見るに興

有。仏石並び立、弘法の九耀曼陀羅ヨウアツダラ

石二ツあり。又仏嶋とて海中ニ立り。

一 鳥羽浦 浦廻りの嶋々ニハあらふ浪

白くたち、漕かへる大小の舟共の嶋陰に

帆並を争ひ、磯辺の城に続きて民

家のふとしき柱、大なる薨きらめき、

交易しげくの都会也。嶋々の名ハ数

をしも云つくされず。あるハ大嶋桃取あく

しけんも、大方釜雄嶋、蠶カイコじま等ハ近く

て見る所也。手節^{タフシ}が崎は遠く二里ばかり
東北に有て、七里四方也。

万葉十二

時鳥鳥幡の浦のしき浪のしバく君を
見んよしもかな

たちはきのたふしが崎にけふもかも大宮人の
玉藻刈らん

是より陸路、舟津、岩倉、白木、五智
等を経て磯部に至る。

一 波賀地の浜 又はかせ共云。伊良子(9ウ)

鳥羽にならべり。鰹魚をとる所也。

山家集西行

いらこ嶋に鰹釣る舟並び浮てはかちの
浜に流れてそよる

一 酢我嶋^{スガ} 一名夏見の浦。鳥羽より東南二り半

山家集

すが嶋やたふしの碁石分かへて白黒まぜよ

浦の浜風

すが嶋や夏見の浦に寄波のあいだもおきて
我おもわなくに

一 参
河 国

伊良子嶋 鳥羽北渡海二十里

万葉

うつ麻のおミの大君あまなれやいらこが嶋の
玉もかります

波もなしいらこかしまか崎に漕出てわれから
つけるわかめ刈海郎」(10オ)

一 鸚鵡石 宮川の上、一ノ瀬谷中村と云所ニ有。

宮川の渡場より三里サカノボ浜り、川口と云人家

有。此所西ハ大楢谷ヲ、スギ、野尻、三瀬川ミセより流れ

来り、東ハ駒が野川一の瀬よりの落合

也。此より駒か野へ三リ。鸚鵡石迄ハすべて八リ

といへども、山路難所ニして、春の一日も暮に及ぶ。

船ニて往来すれば労少し。又下りニハ急

流なれば尤早し。川筋絶景也。別して

駒が野より上ハ巖^{イハホシレ}聳^へて、就^レ中中村の南、
能見坂といふ所ハ無^レ双の勝景ニして、松嶋
に劣らずといふ。其南ニ槌柄^{タシカラ}、阿曾などいふ

村落数多有て、常ニ往来繁^ク、山田の

市中へ魚荷の出る事昼夜不^レ絶、

山中ながら魚鼈に乏しからず。又旧跡

あれども略^レ之。

響石ハ山の半腹に偃然たり。高サ十丈斗り

色青黒し。其右手百間斗の所、其石上に

居て弦哥、鼓吹、言語するに、其音声、石

中に物有て応答するがごとし。」(10ウ)

(以下、13才まで白紙)

阿曾浦片山寺へ道程くしだより九里余

櫛田より半り、齋宮大仏より二り、田丸〈天神前・大坂屋〉より

四りニ近し。駒が野〈孫六〉より三り、阿曾

山田より一り、佐八〈入り口ニ茶や有・川有〉より一り半、川口より一りニ近し。

栗原〈ば、茶や〉より二りニ近し。駒が野より一り余、中村より〈鸚鵡石有・

九五郎茶や有レ能見坂ノミ〈打越し・五十丁遠景無双ノミ〉・道方ノミ〈渡し舟・賃二十文也〉
阿曾

田丸より阿曾へ六り斗、山田より阿曾へ七り斗

オホムサキ響石、能見坂等ハ田丸より行ても同事也。必

可見所なり。」(13オ)